広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『道草』の成立と位置
Author(s)	崔，鎭善
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 ， 1989 ： 41 - 48
Issue Date	1990-03-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039261
Right	
Relation	

『道草』の成立と位置

崔　鎮善

第一部　「道草」の成立

渡り九の見変てをし
にて三こををえ」と
回れ、論邑終る材
ニわで た異もをあ素
百言まりの学でを
で、と日てり品留猫治
まで作ニ掲かのり輩実
日成月にでそギ吾の
四完二上間てイ「身う。
一のら紙のいのに自大
月後か聞者お間」者り
大最日新究研」ニ年ス作て
から、の三日研」ニ年ス作て
日石一月じ漱道草」が、ト時知
三漱のをては「ホ当が
月年」い石草に「ュ
六た。じ中っ漱道主デ
年れ回のに「漱道主デは、
四さと戸立けのらへと」
正載」子成だこか界こ草
大連草硝とれ。て世る道
は、に道「置そう来のあ「で
は聞「品位、よて学ではまと生を直まは石がなこ
新は小のし之，文説隆是ユの影をぎ公漱三し、
草日石る」る言帰て小豊しジ身面れま人、健験
道朝漱互草いとにし伝宮怨一自のそさ主どの體
て。に道てた都載自小
る回「せえ京掲た

タ分石も、た、の日
モン自漱に、っ、
は、き人と違草な り草」
が、石つ主石「道支「自分で
若漱は の漱にもとま、り
生も、ど，なしくまて可
石中公くな。怨少少のつ
のにもせい、そ言
漱の人のかる。て、
て品主そ行あして。が
主とし作の品り。はで做現自身た
ど作な譯にの見表石か つ
のはるね石たとに漱裸裸、漱
品視れて漱裸未ものは、一っもな
にはれま未ものは、一っもな
まれる。ど、っている。

期をど現言こ視し汁辺甲寺の子り、
時間）表とる一たこのに国汁
取四裸裸に」か見同はてこめ仏こ戸ッしで、
材年ろう姿体や皿た。た都て江ら説では、
のは裸あ石の自ちきりす京持りつめ小すと
「『（もし赤で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
道草』間接もの石の自ちなど描記キの し自と的小
草』く未裸ろ姿体や皿た。た都て江ら説では、
道草』間（もに、で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
「『（もし赤で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
時間）表とる一たこのに国汁
期をど現言こ視し汁辺甲寺の子り、

に対して年「間直接もの石の自ちなど描記キの し自と的小
説互実的人れ「道草所に、三を得た我そ中ちらで訪写に、皿多かっ的な説
説互実的人れ「道草所に、三を得た我そ中ちらで訪写に、皿多かっ的な説
に対して年「間直接もの石の自ちなど描記キの し自と的小
「『（もし赤で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
道草』間（もに、で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
のは裸あ石の自ちきりす京持りつめ小すと
取四裸裸に」か見同はてこめ仏こ戸ッしで、
時間）表とる一たこのに国汁
期をど現言こ視し汁辺甲寺の子り、

説互実的人れ「道草所に、三を得た我そ中ちらで訪写に、皿多かっ的な説
に対して年「間直接もの石の自ちなど描記キの し自と的小
説互実的人れ「道草所に、三を得た我そ中ちらで訪写に、皿多かっ的な説
に対して年「間直接もの石の自ちなど描記キの し自と的小
「『（もし赤で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
道草』間（もに、で漱も『「健ん訪写に、皿多かっ的な説
のは裸あ石の自ちきりす京持りつめ小すと
取四裸裸に」か見同はてこめ仏こ戸ッしで、
時間）表とる一たこのに国汁
期をど現言こ視し汁辺甲寺の子り、

と説明し、ろ十限する。きにへよの現象」所か身お
説明こ三ヌとりで訳都し姉表印ょいら自も
と治のたいて学者の夫だとをかと
明とし、タイそ「道草」は漱三に映唯石
ってがそのまま健三は漱
とする京はたのしちち石う
か飲りりでまらど漱ど

られている。健三が漱石自身の分身であることは言うまでもなく。作者は一段と上から、全体を見おろして、観察して、健三をとりまく人々，細君，養父母，兄や姉夫婦、妻の父などに、公平な取り扱い方をしている。それだけに、漱石と健三の間に間隔がはっきりと表わされている。

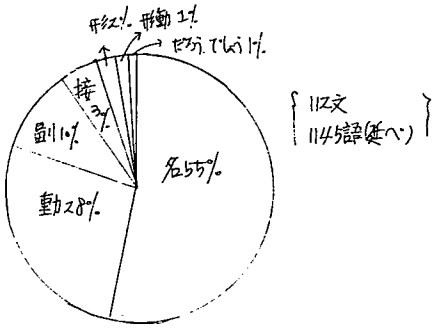
「教育が違うんだから仕方がない。」
彼の腹の中には常にこういう答弁があった。
「夫っ張り手前味噌よ」
これは何時でも細君の解釈であった。点の毒な事に健三はこうした細君の批評を超越する事が出来なかった。そう云われる度に気不味い顔をした。ある時は自分を理解しない細君を心から忌忌しく思った。ある時は叱り付けた。又ある時は頭ごなしに遣り込めた。すると彼の癇癪が細君の耳に空威張をする人の言葉のように響いた。

自伝的小説になれば、かなり主人公一本調子になりがちなのに、作者は健三の内面を取り立てて、健三の主観をより客観的に表出しているのである。それは健三にだけするのではなくて、主人公の相手役である細君にも同じ立場がうかがわれて細君の主観が相対化され、描写され、表現の相対化・客観化をなおかつ徹底的なものにしている。こういうことは、漱石文学の作品の中で、はじめて表われて、ある意味では「心」との断絶を意味している以後、その傾向は「明暗」で一層徹底的な形を取るのである。

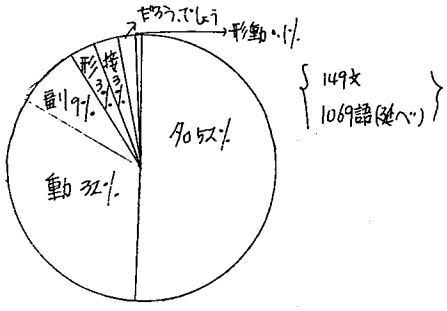
第二部　「道草」の位置づけ

漱石の小説の中で「道草」（大正四年）と「明暗」（大正五年）との語彙の実態においてどのような差異を示すかを検討してみよう。

「道草」



「明暗」



「道草」と「明暗」を一節から三節まで（部分調査）をほぼ同じ文章量を取って、これらの品詞別語彙（自立語のうち、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、接続詞、どうろう・でしょうなど推量表現）を調査した。まず、名詞語彙は、「道草」が「明暗」を上まわる。これは「道草」では個有名詞が「明暗」より多く用いているからである。「道草」で、媒介（なかだち）、洋傘（こうもり）など、宛字漢字が少くないのに比べ，「明暗」では虚言（うそ），裡（うち）、洋卓（テーブル）、軌道（レール），洋杖（ステッキ）などの多用が目立つ。

動詞語彙は「道草」より「明暗」の方が上まわっている。「下した」「見えた」「受け取れた」「否定した」など、客観的な様態を表わす語彙を用いたに比べ、「道草」では「思った」，「感じた」「忌んだ」「気が付いた」，「脅やかした」，「気がつかなかった」「思わなかった」などの主観的感情を表わす語彙が多く用いられている。それも「道草」で用いられた、主観的感情を描写しているかただの描写ではなくて作者が一段と高い所から見っている描写であって主観的自己表現を「彼」「細君」という言葉と共に客観的にしようとした。次は、名詞語彙と動詞語彙を除外したその外の語彙の比率を見ると，名詞語彙とか動詞語彙に比べて大変その数が少ない。それに副詞，形容詞，接続詞，推量表現の語彙など、ほとんど同じ割合であった。

このような名詞語彙や動詞語彙その外の語彙は、日本語の構造からみて、基本的数値から大きな異同はないはずである。

以上、「道草」と「明暗」の品詞別語彙の実態を通してみて分かることは、比較的心理状態を表わす語彙で構成されているのに対して「明暗」の方は単純で叙述的な語彙で構成されていると言えよう。（特に動詞語彙において）

①「だけど、ああして書いたものを此方の手に入れて置くと大変違いますわ」
「安心するかね」
「ええ、安心よ。すっかり片付いちゃったんですもの」
「まだ中々片付きゃしないよ」
「どうして」
「片付いたのは、上部だけじゃないか。だから御前は形式張った女だというんだ」
細君の顔には不審と反抗の色が見えた。
「じゃどうすれば、本当に片付くんです」
「世の中に片付くなんてものは殆んどありゃしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変るから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ。」
健三の口調は吐き出す様に苦々しかった。細君は黙って赤ん坊を抱き上げた。
「ああ好い子だ好い子だ。御父さまの仰ゃる事は何だかちっとも分りゃしないね」
細君はこう云い云い，幾度か赤い頬に接吻した。

「道草」のキーワードは、「片付」かないのであって、この「片付く」「片付」かないとの健三と日常生活者としての細君との対話で、苦々しく息を吐き出す健三であるが、ある意味では一見、日常生活者と正反対の立場で物を見るよう見える健三こそ、徹頭徹尾、「社会」②の中にあって、「自然」を希求した、自分の仕事に没頭する生活人であるにすぎないのではないかと思われる。この「片付」かない，「片付く」という言葉のうけとめ方によってかなり，「道草」の位置づけが違って来るわけだが、念のために従来の評価を顧みると、「世の中片付く……自分にも解らなくなるだけの事さ。」の節において健三が日常的なものに負けてしまった，つまり健三が負けてしまったことは「道草」は自伝的な小説だから，漱石自身が負けてしまったことにつながると

言っているのである。⑥第一部にも触れたとおり「道草」が自叙伝的性格をもってはいるが、けっして健三と漱石を同一視する訳には行かないことを例文を上げて述べた。また、健三こそが徹頭徹尾，生活人であったことは漱石が「道義欲と生活欲、論理と事実との背馳」に悩みながら「矛盾を一元化せねばやまなかった」と言う所で一層、はっきり浮び上がって来る。⑦だから「自己の正しさ」を主張してそのほかを認めない，それでそれに立ち向う「自己絶対」の立場，言わば「自己本位」から自己主張ではなくて他人を認める立場，つまり「則天去私」への思想的な転換の流れで、「道草」を把握する小宮豊隆氏の説が主流をなしているが、小宮氏さえ、この節において健三が日常的な現実に負けてしまったというふうに否定的に受け止めて解釈している。それ以外にも、小田切秀雄氏の「私は漱石の全作品中「道草」を最も愛読している」と言ってはいるが「片付くなんてものは殆んどありゃしない」というやむない結論にまで押し出されてしまった」と言ってやはり小宮氏と同じように、健三は日常的現実に負けてしまったという結論を出している。でも健三は、かえって日常的現実に立ち向っているのではなく、健三の現実は一個人として生活者の側に根を降しているのである。回りの養父母のこととか、兄姉夫婦のこと妻の父のこととか、健三自身につきまとっている環境はちっとも「片付」いていないのであるが、健三はその現実を何とか打開の所まで引き上げたいのである。この一節でも、比田も兄も細君も島田から「向後一切の関係を断つという」証文を受け取って、それで島田とのことは「片付」いたと思ってうれしがるがそれに比べ、健三は苦々しい口調で「世の中に片付」くなんてものは殆んどありゃしない」と述べて、表面的には「片付いたように見えるがなかなか「片付」けない現実を、改めて認識するのである。そこには何ら現実に負けたという被害意識じみたものはないのである。ただの「片付」きにくい現実への認識があるだけのことだ。

その認識というのは、また島田のことに限ってではなくて「片付」かないままの状態にあるのはいくらでもある。論理を持った生活者である健三は、そういう現実がやりきれないのである。人間の一生において一度結ばれた因縁は決してたやすく切ることができない。遠い国から帰って来た健三にも、その事実は当てはまって、「道草」はある小雨の降る日、健三が十五・六年の前に縁を切った、養父島田と会うことから始まる。また健三が進んで島田と手を切るに至った所で「道草」は終っている。遠い国から帰って来た健三を待っている現実はどんなものであろう。「過去の幽霊」である島田は吉田を間において健三に交際を頼んで来るが同時にいろんな因縁のある人物と交渉をもつようになる。まず、島田を始め、お夏という養父母であって、彼らはもともと吝嗇な人たちだが健三にはむやみに寛大で大人さえ着られない洋服を買ってもらったり武者絵、錦絵二枚つづき三枚つづきの絵も高い脇差も健三が言うがままに高級なおもちゃを買ってくれたのである。養父母の奇妙な愛情は彼を小暴君に仕向けた。養父母は彼に「御前の御父さんは誰だい」「じゃ御前の御母さんは」という質問を繰り返し、繰り返えしたのである。それに対して健三は「彼には既に身体の束縛があった。然しそれよりも猶恐しい心の束縛があったと述べている。

将そを不
なくて、縁の
ではなく、健三
はのそに、
たがてる。
たかれ目で
やさをの所に
やせ戻金たの上で
て、にはしかき息つ間が。まは、きが重教ん」う自ら
しり家田わほま喘一人うた、次生者物「ふよ」もてかもて、ば、之出二円て健
くた実島表、をのだとよっは。に作てに思嗜「ふ、いきい思」てうる見物
しっでにをでり倒たるしあえた界てせ住合味がなしべてとにぜふえを人
さや因の姿で使が「見てで云っ世い合お左前住にわすべか君さう言立各
やて原なの同小夏るをっ人とあなてしはら手お間構属述る紐をりも対各
にっかとそぼうおりのあのだで別しら三かり、人も従とりを頭ととの、
三買和こ、ほ蔑のでたで去得健を不のびもが姉んれ実過自物た存に。悪っま、夫た、的前た省ズたり
ら物の前再合ら。読ぱ現く業けま、側りが矢。有くは、囚斯のし、イ見て
かて毋年て場くるを結、じ自息はでのし頭「る を無妻ある敵のをリゴてレ
情し久六しのいり本でた同な「と側住びはにい質は、トぐのも顔限エし立
愛に養・と田らてで型まもくる三のおき前三て実ど て所るてなりの析対
な的も五徴比かし顔なが即ヌり使対ははお健しのな見此ぐしれうない分、
純目情十象夫弟をな変れた「て、反にり「はをけ書らはをと憐そま互をし
単を愛がのがが浩気とそ長はしも正時とか住せだ自か根上剤りし込お格
は酬なの去姉妻生平男が、今ら住と、りとお会るう味大の和弱嬉割、性錯
毋報妙た過との婚も」う兄て漏お三側や」てゆれい意る」緩。もがてのら
久の奇っな姉気結ていい思。っらの健ののい、背らとるす輪はた君」い物す
養来の切幸　病はいなとる。あか君は三方なかもけ夫ゆ突り怨っ細削て人た

ていて姉てのいいで」ロ細住健両が向で愛い。ら衝円自女た。和、要ひ
とえ例なて嫌とがおはに方にま、好あが「てに、緩ゆ重、
て比でけで感勉ねある。にけ住れっぱが「人、し想取の回にら
お田衰たはじ強」る時どらそいれるは二く上哀を怨るうが
い姿掛のをでさである れか、てけ来三「な幸可嫌自ぐよな
囲るのをも鬱好の住ですそどしたて健、間@「も機「るのり
をず食葉な憂チもお物をがん蔑えけ出といえにりはぐ上合
女小絶言常ら派なの人張るう軽返受にう言絶まよ限係をいい
たかれ目で当ある。 細り正か「ん君る主べ違とりを前言とはた配る関」。向
やさをの所に眠り不しでいはそ細りさ述が言敬のと」人時心得の輪ると
世戻金たの上で優的な元あ、て自を育だ」と尊分」だ」二、て来人りり三
て、にはしかき息つ間が。まは、きが重教ん」う自ら の、ば、之出二円て健
しり家田わほま喘一人うた、次生者物「ふよ」もてかもて、ば、之出二円て健
くた実島表、をのだとよっは。に作てに思嗜「ふ、いきい思」てうる見物
しっでにをでり倒たるしあえた界てせ住合味がなしべてとにぜふえを人
さや因の姿で使が「見てで云っ世い合お左前住にわすべか君さう言立各
やて原なの同小夏るをっ人とあなてしはら手お間構属述る紐をりも対各
にっかとそぼうおりのあのだで別しら三かり、人も従とりを頭ととの、
三買和こ、ほ蔑のでたで去得健を不のびもが姉んれ実過自物た存に。悪っま、夫た、的前た省ズたり
ら物の前再合ら。読ぱ現く業けま、側りが矢。有くは、囚斯のし、イ見て
かて毋年て場くるを結、じ自息はでのし頭「る を無妻ある敵のをリゴてレ
情し久六しのいり本でた同な「と側住びはにい質は、トぐのも顔限エし立
愛に養・と田らてで型まもくる三のおき前三て実ど て所るてなりの析対
な的も五徴比かし顔なが即ヌり使対ははお健しのな見此ぐしれうない分、
純目情十象夫弟をな変れた「て、反にり「はをけ書らはをと憐そま互をし
単を愛がのがが浩気とそ長はしも正時とか住せだ自か根上剤りし込お格
は酬なの去姉妻生平男が、今ら住と、りとお会るう味大の和弱嬉割、性錯
毋報妙た過との婚も」う兄て漏お三側や」てゆれい意る」緩。もがてのら
久の奇っな姉気結ていい思。っらの健ののい、背らとるす輪はた君」い物す
養来の切幸　病はいなとる。あか君は三方なかもけ夫ゆ突り怨っ細削て人た

ドい」なるをあく者でも
るな草りり学、た読んで
あい道あて文はりに読ゆ
かて「でしがのこい度の
品れくそ出者う起大一そ
作さらこり読いにはが
り解そる作のと際」いだ
な理おりを般々実草なん
くり界一望、道も込
しろまは、して世、の で「くい
あれ験学てそわとろ思
もは、そ経文し。囲るしと
おは。日りとか範めも
ど、にう毎な者い認おう。
ほ読と身純のはいれ私だ
般う自単学でてそ。説小
「道草」一ろ者、文られ。る た
草にだ読て石かなるなた
「けい、っ瀬るはあにし
私ゆうにくもあ人あけで品と
と、ドくでで個がか語作め
の思れこ種一ヌら物りじ
品うさど複もぞかのくめ
草作そ解、は私の浩でにじ
「道のが理で造。る生実得で
部瀬石私、た浩構るあ的現をん
三目かま常そでの日空人”
第夏う、日らむり架らら
ろしがかか読まいかか

印象に残ったのが健三の人間味であった。むやみに孤独である。いつまでも、終りも始めもない無意味な日常生活で、彼は頭の中では明瞭な意識をもっている。それで"書斎牢"にとじこもって、自分の研究を続けながらも「索寞たる曠野」の方角へ」自分自身を進めながらそれが「温かい人間の血を枯しに行くのだと思わなかった」のである。健三はまた⑪「学問ばかりして死んでしまっても人間はつまらないね」、「姉はただ露骨なだけなんだ。教育の皮を剥けばみんな大した変りはないんだ」とつぶやいて、知識だけやっていても自分もまわりの人々と結局は、同じ存在ですぎぬのではないかと深く懐疑するのである。それで漱石自身が読者に「もっと卑しい所、もっと悪い所、もっと面目を失するやうな」所を堂堂と見せてくれたし、ある意味では世間の読者に自分自身をもって理解してもらいたいために、また作者になってからの自分自身に⑫「硝子戸の中」を相い次いでけじめをつけたくて書いた愛着深い作品である。自分自身も結局は「平凡なただの人間じゃないか」と悟って行きながら懐疑し、葛藤をやまない姿がいい。「道草」の中心となっているのは、主人公の健三とお住の果てなく続く葛藤であって二人は憎悪し合いながら別れようとしないで与えられた自然のように順応して生きていくのを本来だとばかり考える。でも健三の場合、比田がお夏に「ただの一つ優しい言葉を掛けた例のない」薄情な男だと言えるけど、はたして健三もそうだと言えるだろうか。

⑬「おい、己だよ。分るかい」

こういう場合に彼の何時でも用いる陳腐で簡略でしかもぞんざいなこの言葉のうちには、他に知れないで自分にばかり解っている憐憫と苦痛と悲哀があった。それから跪まずいて天に禱る時の誠と願もあった。

「どうぞ、口を利いてくれ。後生だから己の顔を見てくれ」

時時、意識をなくして気を遠くするお住を何度も経験している訳だけども健三はその都度に心を焼いて、心配して寝ている細君を起こして確認しなければ気が済まないでいる。⑭「しかし、その姉が月々健三の乏しい懐ろの中から何がしかをせびり取ることを拒んではいない。だが拒まないことでいささかも健三が甘い眼を持っている訳ではない。」健三は遠い国へ行く前から毎月いくらかの小遣いを姉に上げているし遠い国から帰って来てからもそれを忘れていない。そこに健三の甘い眼があるのではないか。なぜ、健三が時には憎悪し、時には軽蔑する細君にもそう気を使うし、姉にも毎月いくらかの小遣いを上げているのだろう。その上、金をせびるのが目的で近付いて来る養父「過去の幽霊」島田にも不幸であった時期を思い出したくないながらも差出したその汚れた手を払いのけようとしないのだろう。それは健三の内面に絶え間なく流れている温かい人間味，またぬくもりを追求する不屈の精神が心の深い所にいつも、溢れているからだと思う。そこで滲み出る温かい人間味は結局、漱石の有様にも重ね合っている所がある。⑮「漱石は慶応三年（一八六七）二月九日（陰暦一月五日）に生れ、生後ただちに里子に出され、明治二年（一八六九）三歳までの時、塩原家の養子として入籍され、後に明治二十一年、二十二歳の時夏目家に復籍し、再び夏目金之助となった。実父直克は養父昌之助と「為取替一札之事」を交換し、一月二十七日即金で百七十円支払い、

残りを月に三円ずつ支払った。明治二十二年二月二十六日に皆済ましている。」前述べたとおり生まれてからまもなく養子にやられてしまって養父母は漱石を大事にしたが漱石の出生は歓迎されなかったただけに愛情に乏しい環境はのち、漱石に人間の愛情、自由とかを小説という型で求めるように仕向けたかもしれない。そこしれない人なつこさを漂わせるのが「道草」である。もし漱石が今まで生きていたら、私は聞いてみたいことがある。「道草」の題目はなぜ「道草」であるか内容とのかかわりをどう結びつけばいいのだろうか、また、なぜ「道草」を書く気になったのか。漱石ならいくらでもおもしろい人気のある小説が書けると思うし、実際、そういう作品がたくさんあるが、なぜ、じめじめとした陰気な小説を書いたのだろう。「道草」の単語的意味を②辞典で引いてみた。まず「大言海」では①路草、路傍ニ生ヒタル草。②馬ノ路草ヲ食ヒテ、行クコトノ遅クナルコト。轉ジテ、徐ニ人ノ路ヲ行キナガラ、遊ビ戯レナドシテ、暇ヲ費ヤスコト。と書いてあって「大辞林」，「広辞苑」なども ほぼ同じ意味であった。ここで私は単語意味を最大限生かして「道草」と内容を結びつけてみた。この「道草」と内容を結ぶのでは、なぜ漱石が小説を書いたかという疑問と大いにかかわりがある。漱石は愛情乏しい土地で不幸な少年時代を過した。大概のうち気の少年と変りなしに空想にふけて、体と心が束縛されて自由な存在でありたかったに違いない。そういう傾向が下地になって漱石が書く小説に反映されているのだ。この時代は漱石がイギリス留学を終えて「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して評判を得 て華かに文壇に登場する後で観みれば一種の人生の道草を食った時期になるのではないか。「猫」を書いて「漾虚集」を発表して本格的に「坊っちゃん」を発表する漱石にとって文人の道が本来であってその前のことは馬が目的地へ行く途中に食う道端の草になって馬が遠い道を行くためには道端の道を食って力を蓄えるのは大事なことであるように漱石にも不幸ではあるが目的地に行くためには必ず必要な時期であったのではないか。それで漱石は人生の一峠を越した時点でもう一度振り向いて見たくなってそれが「道草」というふうな形で私たちの前にその姿を表わしたのではないか「？」。そう言っても、疑問が全部なくなった訳には行かない。ここに「？」疑問符を打たなければならないだろう。

〈以　上〉

〈注〉

・第一部

① 『漱石文学全集』集英社。「道草」に関しての小泉豊隆の説明。

② 「道草」二十八節引用

③ 相原和邦 『結語、漱石の表現特性．四、成果の集約－「道草」

・第二部

① 百二節引用．この作品全体を締め括る意味のある言葉．「片付」かないという単語が出て来て研究者の間で議論が多い．

② 江藤淳「道草」－日常生活と思想－『決定版夏目漱石』参照

③ 本稿の第一部「道草」の成立参照

㊐ 相原和邦「亚研究史論、第一章「道草」　『漱石文学』
㊑ 小田切秀雄　「道草」の今日に示唆するもの　『日本評論』
㊒「道草」の七十一節引用
㊓「道草」の七十八節引用
第三部
㊔「道草」三節引用
㊕「道草」二十九節引用
㊖「道草」六十七節引用．痛烈な自己分析が行われている部分。
㊗「硝子戸の中」大正四年（一九一五年）一月十三日より二月二十三日まで「朝日新聞」に連載された。
㊘「道草」二十五節引用
㊙「道草」五十節引用
㊚ 小田切秀雄『「道草」今日に示唆するもの』四参照
㊛ 集英社『漱石文学全集』「漱石の思い出」（昭和三年十一月二十三日改造社刊）参照

参考文献

1)、相原和邦　『漱石文学の研究－表現を軸として』明治書院　（一九八八年二月二〇日
2)、木坂基　『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房　（昭和51年一月一五日
3)、相原和邦　『漱石文学－その表現と思想－』塙選書　（昭和53年七月十日
4)、小田切秀雄　『「道草」の今日に示唆するところ』「日本評論」一九四六・七
5)、江藤淳　『決定版、夏目漱石』　新潮文庫　一九七九、七
6)、小宮豊隆　『夏目漱石』岩波書店．昭和一三年
7)、越智治雄　『漱石私論』角川書店、昭和四十六年六月二十日
8)、芳正人　『「道草」における生の再認』集英社　一九八四年六月